

慶應義塾大学 SFC研究所

看護ベストプラクティス
研究開発ラボラトリ
Report of 2014

看護ベストプラクティス研究開発・ラボ

Laboratory on Innovative Research and Practices for Nursing

開設：2012年3月1日

代表者：小松 浩子（看護医療学部教授）

関連 Web Site：<http://www.kri.sfc.keio.ac.jp/japanese/laboratory/nursing.html>

連絡先：慶應義塾大学看護医療学部小松研究室

本ラボト리는、最善の看護実践（ベストプラクティス）に不可欠である、(1) 看護実践の質保証 (Quality) を推進する実践研究開発、(2) 個別化・最適化した看護実践を現場に浸透・波及 (Utility) できる看護リーダーの養成、(3) 当事者の価値を尊重する倫理的看護実践の醸成 (Explore)、をめざすものである。

■メンバー

小松 浩子	看護医療学部教授	ラボラトリー・リーダー、がん看護実践質保証研究開発
太田 喜久子	看護医療学部長・教授	高齢者看護実践研究開発
野末 聖香	看護医療学部教授	精神看護実践研究開発
武田 祐子	看護医療学部教授	遺伝看護実践研究開発
宮脇 美保子	看護医療学部教授	倫理的看護実践研究開発・ベストプラクティス先導ナース研究
藤井 千枝子	看護医療学部教授	看護技術研究開発
小池 智子	看護医療学部准教授	ベストプラクティス先導ナース開発研究
新藤 悦子	看護医療学部准教授	がん看護実践質保証研究開発
茶園 美香	看護医療学部准教授	患者、家族のセルフケア研究開発
矢ヶ崎 香	看護医療学部准教授	がん看護実践質保証研究開発
中村 幸代	看護医療学部専任講師	母性・助産学実践研究開発
朴 順禮	看護医療学部専任講師	がん看護実践質保証研究開発
福田 紀子	看護医療学部専任講師	精神看護実践研究開発
井ノ下 心	看護医療学部助教	がん看護実践質保証研究開発
笥 亮子	看護医療学部助教	精神看護実践研究開発
関 美佐	看護医療学部助教	看護技術研究開発
仙波 美幸	看護医療学部助教	がん看護実践質保証研究開発
高畑 和恵	看護医療学部助教	遺伝看護実践研究開発
瀧田 結香	看護医療学部助教	看護実践質保証研究開発
中尾 真由美	看護医療学部助教	がん看護実践質保証研究開発
平野 蘭子	看護医療学部助教	看護技術研究開発
真志田 祐理子	看護医療学部助教	高齢者看護実践研究開発
緑川 綾	看護医療学部助教	精神看護実践研究開発
増谷 順子	SFC 研究所上席所員	高齢者看護実践研究開発

目的

医療現場では、日々新たな診断・治療が開発され、診療および看護はますます高度化・複雑化している。一方で、医療の効率化が叫ばれ、入院の短縮化、外来診療への移行が推奨され、患者や家族には通院による治療継続、セルフケアの促進が求められている。患者や家族は、移り変わる診療の場・環境のもとで、高度な医療内容を理解し、納得のいく判断のもとに診断・治療を受けることに多大な努力をしている。また、自身のワークライフと療養のバランスを上手にとることに力も注いでいる。複雑で高度化した医療の中で、＜安心と安全＞が保証され、＜医療に対する納得と満足＞が得られ、＜当事者の価値が尊重＞され、＜充実した生活や生き方＞ができるよう、最善の看護実践（ベストプラクティス）を提供する必要がある。

本ラボト리는、最善の看護実践（ベストプラクティス）に不可欠である、(1) 看護実践の質保証 (Quality) を推進する実践研究開発、(1) 個別化・最適化した看護実践を現場に浸透・波及 (Utility) できる看護リーダーの養成、(3) 当事者の価値を尊重する倫理的看護実践の醸成 (Explore) 、をめざすものである。この目的のために、＜看護実践の質保証研究開発＞＜ベストプラクティス先導ナースのキャリア開発＞＜倫理的看護実践のためのシステム構築＞の3つの研究グループを組織化する。研究グループには、臨床現場においてベストプラクティスを推進している看護専門職者のほか、本ラボト리의主旨に賛同いただける学外の研究組織、医療施設の方々を訪問研究員として迎え、共同研究をすすめる。忘れてならないのは、患者中心の視点をラボト리의根幹につねに置くことである。そのために、定期的に、市民フォーラムを開催し、患者団体、地域住民等との交流を行い、研究成果の発信、評価、意見交換を行っていく。各プロジェクトの内容を記す。

プロジェクト A: 看護実践の質保証研究開発

臨床現場における最善の看護実践のアウトカムは、患者の安全と安心の保証、患者・家族の医療に対する納得と満足、患者のQOLの向上である。患者アウトカムを促進するための最適なケアのエビデンスを集積し、標準化を行う。ロジックモデル等の質評価理論に基づいてケアの質改善デザインを設計し、標準化したケアの検証を行う。

プロジェクト B: ベストプラクティス先導ナースのキャリア開発

臨床現場でベストプラクティスを浸透・波及できるかは、＜医療イノベータ＞の役割を担う看護リーダーの活躍にかかっている。このプロジェクトでは、最適なケアと患者のアウトカムを促進するために、患者（個人、家族、またはグループ）や他の専門職との治療的関係と協働関係を結び、各チームやユニットにおいてケアの質保証システムを稼働し、ケアの改善を先導する看護リーダーの育成プログラムの開発、検証を行う。

プロジェクト C: 倫理的看護実践のためのシステム構築

熟慮・納得のもとに、自身にとって最善の診療・ケアを選択する意思決定支援プログラムの開発と検証、および複雑な病態・治療過程、脆弱な療養環境で生じ得る倫理的課題に対応する臨床倫理コンサルテーションシステム構築と実証をすすめる。併せて、組織的に倫理的看護実践が行えるケアリング風土の醸成を探索する。

研究活動計画の概要

プロジェクト A: 看護実践の質保証研究開発

患者アウトカムを促進するための最適なケアのエビデンスを集積し、標準化を行う。

プロジェクト B: ベストプラクティス先導ナースの開発

臨床現場でベストプラクティスを浸透・波及できるリーダーナース、臨床指導ナースの能力・役割を特定化し、キャリア開発プログラムを検討する。

プロジェクト C: 倫理的看護実践のためのシステム構築

事例検討により、複雑な病態・治療過程、脆弱な療養環境で生じる倫理的課題について検討する。

- 1) 経口抗がん薬治療を受ける患者のアドヒアランスに関するケアの開発
- 2) 乳がん患者の化学療法誘発性認知機能障害に対するヨガを用いた活性化プログラムの開発
- 3) 上部消化管術後障害をもつがん患者の活力と QOL 向上をめざすリハビリテーション開発
- 4) 若年女性がん患者の妊孕性温存に関する意思決定支援統合ケアモデルの開発

小松 浩子 慶應義塾大学看護医療学部 教授
矢ヶ崎 香 慶應義塾大学看護医療学部 准教授

A. 目標

がん患者への最善のケア提供を目指した看護実践の開発、実践への適用、普及を推進する。

B. 計画および実施過程

- 1-1) 多施設共同研究による「経口抗がん薬の服薬自己管理支援プログラムの有効性：ランダム化比較試験と質的研究による Mixed Method」についてプロトコルを作成し、調査を開始する。併せて、Study protocol の投稿の準備を進める。
- 1-2) 「経口抗がん薬治療のアドヒアランスを高める看護実践の実態 (全国調査)」については、2013 年度に収集したデータの分析および論文投稿を行う。
- 1-3) 「経口抗がん薬治療を受ける胃がん患者のアドヒアランスの実態」については、2013 年度に収集したデータの分析および論文投稿を行う。
2. 「化学療法誘発性認知機能障害に対するヨガを用いた活性化プログラムの開発」の feasibility study を遂行する。
3. 「胸部食道がん患者の術後機能回復促進プログラム (STEP プログラム) 開発と feasibility study」のデータ収集を完了すること、および分析を進める。
4. 「若年女性がん患者の妊孕性温存に関する意思決定支援統合ケアモデルの開発」については若年乳がん患者を対象にフォーカスグループによりデータを収集し、分析を進める。

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

- 1-1) RCT の研究のため、データセンター、医療統計学の専門家および多施設との連携、調整、検討を進め、プロトコルを作成し、各施設の IRB 審査を受けた。

本研究の主要評価項目は服薬アドヒアランスとし、方法は研究協力施設の 3 施設で計 200 名の対象を無作為に割付け、対照群は通常ケア、介入群は服薬支援プログラムを適用する。経口抗がん薬開始 3 ヶ月後まで縦断的に質問紙調査を行う計画とした。

服薬支援プログラムは、抗がん薬治療および服薬管理に関する〈理解の再確認〉、〈意向の表出と選択〉、〈相談〉の 3 要素から構成される。介入を担当する看護師に対して、看護師研修会を開始した。準備が整い次第、リクルートを開始する。

併せて、Study protocol の論文がほぼ完成した。今後、投稿を行う予定である。

1-2) 2) の研究は、論文「Current nursing practice for patients on oral chemotherapy: a multicenter survey in Japan.」を投稿し、BMC Research Notes に採択された。

1-3) 3) の研究は、論文「Inner Conflict in Patients Receiving Oral Anti-cancer Agents: A Qualitative Study」を投稿し、BMJ Open に採択された。

2. 「ヨガを用いた活性化プログラム（呼称：リフレ Ring）」は化学療法による主観的に認知機能障害を自覚している乳がん患者 21 名を対象に、ヨガを用いたプログラムを適用し、1 ヶ月後、2 ヶ月後に質問紙調査およびフォーカスグループインタビューによりデータを収集行った。対象者は化学療法による副作用症状の苦痛を抱えながら、必死に治療と生活を送る状況に在るため、本プログラムを通して、自分と向き合い自分を肯定化する機会になったことや、心身を整えることになった等の意見があった。現在、本プログラムの実行可能性について分析を進めている。



3. STEP プログラムに関する feasibility study では食道がん患者 30 名に対して STEP プログラムを適用し、手術後 6 ヶ月まで縦断的にデータ収集を行った。結果として STEP プログラムに対する対象者の理解度と自己効力感、継続希望率は特に 3 ヶ月目が高く、6 ヶ月目にはやや低下していたことも明らかになった。今後はさらに解析を進め、投稿の準備を進める予定である。

4. 若年乳がん患者の妊孕性温存に携わる認定看護師、専門看護師を対象にフォーカスグループを行い、「若年乳がん患者に対し、妊孕性温存に対する意思決定支援を看護師がどのように行っているか、どのような課題を認識しているか」などについて、データ収集を行った。これらの課題は端を発したばかりで多様な要素が絡まっていることが明らかになった。

2. 今後の課題、展望

進行中の研究の遂行と論文投稿を進め、日本のがん看護の情報を国際的にも広く発信する。

3. 2014 年度の業績

【受賞】 Best Poster Award :Komatsu H, Yagasaki K.

Power of nursing: What makes nursing unique? the European Oncology Nursing Society and EONS-9 Congress. (Istanbul, Sep 2014)

【学術論文（英語論文のみ）】

1. Iioka Y, Komatsu H. Effectiveness of a stress management program to enhance perimenopausal women's ability to cope with stress. Jpn J Nurs Sci. 2015 Jan;12(1):1-17.

2. Yagasaki K, Komatsu H. Inner Conflict in Patients Receiving Oral Anti-cancer Agents: A Qualitative Study. BMJ Open. 2015 (in press).

3. Sakuramoto H, Subrina J, Unoki T, Mizutani T, Komatsu H.

Severity of delirium in the ICU is associated with short term cognitive impairment. A prospective cohort study. Intensive and critical care nursing, 2015. (in press)

4. Komatsu H, Yagasaki K, Yoshimura K. Current nursing practice for patients on oral chemotherapy: a multicenter survey in Japan. BMC Research Notes 2014, 7:259

5. Komatsu H, Yagasaki K. The power of nursing: guiding patients through a journey of uncertainty. Eur J Oncol Nurs. 2014 Aug;18(4):419-24.

6. Komatsu H, Yagasaki K. Are we ready for personalized cancer risk management? The view from breast-care providers. Int J Nurs Pract. 2014 Feb;20(1):39-45.



超高齢社会に求められる高齢者支援方法の開発

太田 喜久子 慶應義塾大学看護医療学部 教授

増谷 順子 首都大学東京健康福祉学部 助教

真志田 祐理子 慶應義塾大学看護医療学部 助教

A. 目標

超高齢社会に求められる課題を明らかにし、それを解決するための方法論を探求する。

B. 計画および実施過程

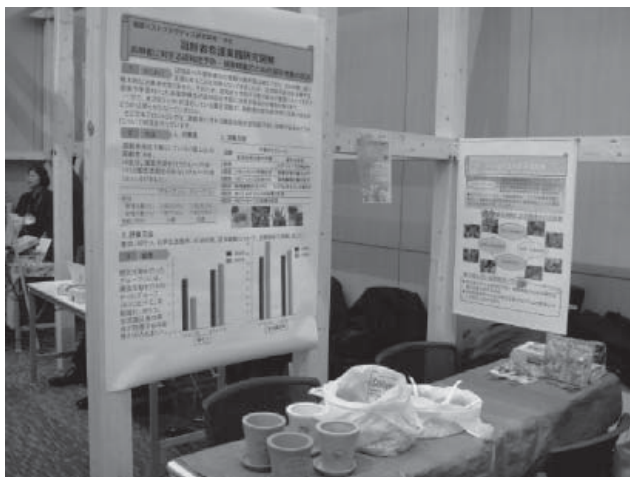
1. 施設高齢者を対象とした認知症予防としての園芸活動の効果
2. 高齢者への災害支援のあり方の探求
3. 大腸癌手術後の高齢者における退院後の生活上の課題の検討

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

- 1) 施設高齢者を対象とした認知症予防としての園芸活動の効果

施設に入所している65歳以上の高齢者を対象として、園芸活動介入群と対照群の2群に分けて、園芸活動プログラムの効果を心理・行動・認知的側面から検証した。研究成果の一部は、SFC Open Research Forum 2014にて報告した。またORFでは、来場者に園芸活動を体験する機会を提供し、園芸活動の特徴や楽しさを知ってもらうことができた。



- 2) 高齢者への災害支援のあり方の探求

日本老年看護学会災害支援検討委員会において、災害時高齢者支援マニュアルの作成、災害に関する交流集会やセミナーを企画、開催した。

第3回国連防災世界会議において、日本看護系学会協議会主催フォーラム「東日本大震災からの復興と生活再建のための看護系学会の活動」の座長を務める。

3) 大腸癌手術後の高齢者における退院後の生活上の課題の検討

今年度は外来の看護相談に携わる看護師の認識を通して、大腸癌手術後の高齢者における退院後の生活上の課題を検討するために活動。慶應義塾大学看護医療学部研究倫理委員会の承認を得て、外来で看護相談を実施している看護師にインタビュー調査を実施した。

2. 今後の課題、展望

- 1) 認知症高齢者のための園芸活動プログラムの看護ケアへの普及に関する実証的研究を行う。
- 2) 緊急時～短期・中期・長期に渡る災害支援のマニュアルを完成、普及させていく。
- 3) 大腸癌手術後の高齢者における外来看護相談の課題や退院後の生活上の課題について、インタビューで得られたデータを分析し、まとめていく。

3. 2014年度の業績

- 1) Junko Masuya and Kikuko Ota (2014) Efficacy of Horticultural Activity in Elderly People with Dementia: A Pilot Study on the Influence on Vitality and Cognitive Function, International Journal of Nursing & Clinical Practices, 1:101.
- 2) Junko Masuya, Kikuko Ota and Yuriko Mashida (2014) The Effect of a Horticultural Activities Program on the Psychologic, Physical, Cognitive Function and Quality of Life of Elderly People Living in Nursing Homes, International Journal of Nursing & Clinical Practices, 1:109.
- 3) 太田喜久子. 教育講演「多死時代に求められる看護」. 第17回北日本看護学会学術集会(宮城大学) 2014.8.30. URL: <http://www.njans.net/>
- 4) Mieko Tanaka, Kikuko Ota(Chair Persons of Forum).Activities of Japanese Nursing Academies related to recovery from the Great East Japan Earthquake and Tsunami, and restoration of daily living. The 3rd UN World Conference on Disaster Risk Reduction Public Forum, 2015.3.14.

造血器腫瘍に対する看護師の精神的ケアへの困難感と 学習ニーズに対する調査

野末 聖香	慶應義塾大学看護医療学部 教授
福田 紀子	慶應義塾大学看護医療学部 専任講師
笥亮子・緑川綾	慶應義塾大学看護医療学部 助教
宇佐美 しおり	熊本大学大学院生命科学研究部 教授
近藤 咲子	慶應義塾大学病院 看護師長
内田 智栄	慶應義塾大学病院 主任
河野 佐代子	慶應義塾大学病院 神看護専門看護師

A. 目標

わが国のがん患者のうつ病有病率は 15～40% にのぼるが、抑うつ状態が見過ごされ、適切なケアが受けられていないことが指摘されている。がん患者の中でも造血器腫瘍患者は、抑うつ状態に陥りやすく、精神的ケアのニーズが高いと言われている。抑うつ状態は、身体疾患の悪化や長期化を引き起こすことも指摘されており、看護師が患者の抑うつ状態を早期に発見し、ケアできる力を養い実践することが期待される。そこで、看護師の精神的ケアに関する教育プログラムを開発したいと考えた。プログラム開発に先立ち、看護師が抱える精神的ケアへの困難感や学習ニーズを把握するため、予備的聞き取り調査を実施した。

B. 計画および実施過程

慶應義塾大学病院で造血器腫瘍患者の入院病棟に勤務する看護師を対象に、フォーカスグループインタビューを行った。インタビューの内容は、①造血器腫瘍患者にケアを提供する際の抑うつ状態のアセスメントの仕方、②患者とのコミュニケーションに関する困難さや課題、③患者へのケア内容の現状とした。

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

2つの入院病棟に勤務する2年目以上の看護師16名を対象に、1回あたり2～4名、全5回のフォーカスグループインタビューを実施した。インタビューでは、①うつとアセスメントする患者の言動・行動や、看護師の経験年数によるアセスメントの違いおよび、身体的苦痛による反応と抑うつ状態との判断の難しさ②表情や反応が乏しい患者や怒りの強い患者に対するコミュニケーションの困難さ③身体状態に応じた日常生活援助や、苦痛緩和のためのケアの工夫等が語られ、教育プログラム作成への示唆が得られた。

2. 今後の課題、展望

今回の予備調査および先行研究をもとに、看護師を対象とした教育プログラムの開発および評価を行う。

3. 2014年度の業績

2014年11月21～22日に開催されたORF2014において、活動の紹介を行った。

遺伝性腫瘍患者・家族に対する看護支援の 開発に関する研究

武田 祐子 臨床看護 教授
高畑 和恵 臨床看護 助教
瀧田 結香 臨床看護 助教

A. 目標

遺伝性腫瘍患者・家族に対して、適切な医療の活用によるがん死の回避と、QOL向上に寄与する看護支援を開発し、提供のための基盤を構築する。

B. 計画および実施過程

- 1) 適切な遺伝医療を提供するためのケアネットワークモデルの構築
- 2) 遺伝サポートグループと看護者との協働方略の構築
- 3) 遺伝性腫瘍家系の長期的支援のためのシステム開発に関する研究
- 4) 臨床遺伝看護分野の継続教育プログラムの開発

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

今年度は、上記 B. に示した 1) 2) については、患者会活動のサポートを中心に、遺伝性腫瘍の診療の中核を担う病院との共同企画と、患者会拠点開発についての模索を行った。

- ・第 20 回日本家族性腫瘍学会学術集会会場（福島）における患者懇親会開催と、パネルディスカッション「FAP（家族性大腸腺腫症）の遺伝診療」の企画・参加（6 月）
- ・国立がんセンター医療者との協働による「家族性大腸腺腫症セミナー」の開催 「消化管がんの診断方法及び病理医の役割」講師：国立がん研究センター関根茂樹（7 月）
「十二指腸乳頭部腫瘍の内視鏡診断と治療」講師：東京医科大学 糸井隆夫（1 月）

2. 今後の課題、展望

上記 B. 3) に関して、難病医療法に基づく、医療費が助成される「指定難病」第 2 次実施分約 600 疾患に FAP が指定されるための活動を行う。

また、4) に関しては、John M.Keller が提唱する「ARCS モデル：(Attention) (Relevance) (Confidence) (Satisfaction)」の活用について検討を行い、プログラム案を作成する。

3. 2014 年度の業績

1. 三須久美子、武田祐子、矢崎久妙子ほか .BRCA1/2 遺伝子変異陽性乳がん患者の挙児希望に対する不妊治療と RRSO に関する検討 . 家族性腫瘍 ,2014,14(2),A40
2. 中込さと子, 武田祐子, 柊中智恵子ほか. 遺伝サポートグループと看護者との協働の方向性. 日本遺伝看護学会誌 13(1),2014,41
3. 武田祐子. 遺伝性患者・家族への看護. 看護技術 60(14),2014,

外来でエンドレスな治療を受ける再発大腸がん患者の 「生を繋いでいく力」への支援

新藤 悦子 看護医療学部 准教授

A. 目標

本研究は、長期化学療法中の再発大腸がん患者の心理社会的問題に関わる療養体験を明らかにし、支援のありかたを考える。

B. 計画および実施過程

1. 研究組織

茶園美香（看護医療学部准教授）、小松浩子（看護医療学部教授）、岡林剛史、鶴田雅士（慶應義塾大学医学部助教）

2. 平成 26 年度は以下の研究活動を行った。

- 1) 当事者へのインタビューを実施と調査分析、成果のまとめ。
- 2) 9 月第 18 回国際がん看護学会（18th International Conference of Cancer Nursing）において 25 年度の成果を一部発表。

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

- 1) 当事者たちの心理社会的問題に関わる療養体験を明らかにした。
化学療法中の進行再発大腸がん患者の心理社会的問題に関わる経験について調査を実施。語られた経験を解釈し考察。
- 2) 第 18 回国際がん看護学会（パナマ / 2014 年 9 月 8 日）に於いて 25 年度の成果の一部を発表した。

2. 今後の課題

研究成果の学会発表（2015 国際サポーターケア学会、6 月）・投稿準備。

3. 2014 年度の業績

- ・ E. Shindo, M. Chaen, H. Komatsu, K. Okabayashi, M. Turuta. Psychosocial Problems of Patients with Advanced/Recurrent Colorectal Cancer Receiving Long-Term Chemotherapy. 18th International Conference of Cancer Nursing. 2014.9, Panama City, Panama

化学療法を受けているがん患者に対する 運動プログラムの構築に関する研究

茶園美香	新藤悦子	慶應義塾大学看護医療学部	准教授
小林正弘		慶應義塾大学看護医療学部	教授
仙波美幸		慶應義塾大学看護医療学部	助教
片岡美樹		慶應義塾大学病院看護部	師長
今井亜矢子		慶應義塾大学病院看護部	主任
辻 哲也		慶應義塾大学医学部	准教授
福島卓矢		慶應義塾大学医学部	大学院生

A. 目標

がん患者用セルフケア型運動プログラムの実施を継続するための、看護師の介入による効果、及び化学療法中のがん患者が運動を実施することに対する患者及び看護師の認識を明らかにし、臨床の場で実行する事の可能性を検討する。

B. 計画および実施過程

- 1) 介入研究：①化学療法中の婦人科がん患者対象に「がん患者用セルフケア型運動プログラム」を3ヶ月間実施、②患者入院時に看護師による面接の実施。
- 2) 質問紙調査：化学療法中のがん患者の運動支援に対する看護師、患者の認識
- 3) 慶應義塾大学医学部研究倫理審査の承認（2013 - 209）を得て実施。

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

- 1) 介入研究：2013年から実施した調査を7月で終了し、現在分析中。
- 2) 質問紙調査：介入開始前後における化学療法中の患者への運動支援に対する看護師の認識の調査を実施し、現在分析中。

2. 今後の課題、展望

運動プログラムの調査結果の投稿論文において、臨床における運動プログラム実施への提言を行い、本研究は終了とする。

子育て中のがん患者が子どもに病気を伝えるための 看護支援プログラムの構築

茶園美香, 新藤悦子	慶應義塾大学看護医療学部 准教授
仙波美幸	慶應義塾大学看護医療学部 助教
鎮目美代子	慶應義塾大学病院 看護部長
近藤咲子, 片岡美樹	慶應義塾大学病院 師長
北村悦子	慶應義塾大学病院 主任
久住真有美	慶應義塾大学病院 ソーシャルワーカー
北川雄光	慶應義塾大学医学部 教授
高石官均	慶應義塾大学医学部 准教授
竹内麻理	慶應義塾大学医学部 助教

A. 目標

子育て中のがん患者が、子ども（18歳未満）に病気を伝えることを支えるための啓発活動を行い、伝えた後の親と子どもを支援するプログラムを実施する。

B. 計画および実施過程

1. 慶應義塾大学病院に「がんの親をもつ子どもサポートチーム（SKiP：Supporting Kids of Parents with Cancer）」を設立。
2. 慶應義塾大学病院に勤務する医療者を対象とした啓発活動の実施。
3. 研究の実施：①介入研究：CLIMB®（Children's Lives Include Moments of Bravery）プログラムの実施と参加者の評価，②実態調査：看護師を対象とした啓発活動による認識の変化と支援の実態。
4. 倫理審査：上記①②について，慶應義塾大学医学部研究倫理委員会の承認を得て実施。
5. 2014年度「慶應義塾大学医学部臨床腫瘍学寄附講座」の支援を受けて実施。

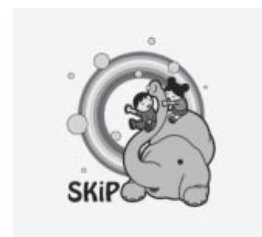


写真1：チームロゴ

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

1) サポートチームの設立

多職種によるボランティア組織（病院医療職員：看護師，医師，MSW，看護医療学部生で構成）を設立し，情報の共有を行った。コアメンバーで毎月定例会議実施。病院医療ボランティアには CLIMB® プログラム参加者のリクルート，実施時の支援協力を得た。

2) 啓発活動の実施

- (1) 外来，病棟への小冊子の配布（4月～），師長・主任会，関連病棟への説明（5月～）。
- (2) セミナー開催：院内セミナー：①「がん患者が子どもに病名を伝えること」（2014年9月26日）：参加者22名（看護師，薬剤師，看護学部生，看護大学院生）②がん看護研修（2014年10月29日）：

外部施設看護師も参加, ③ 2014 年度活動および CLIMB® プログラム実践報告 (2015 年 2 月 9 日)

(3) チームロゴの作成と缶バッジの作製; セミナー参加者, CLIMB® 参加者, ボランティア組織メンバーへの配布.

(4) ORF セッション開催: 「がん患者を親に持つ子どもへの支援」
チャイルドライフスペシャリスト、看護師、サポートグループ
代表の立場から登壇 (2014 年 11 月 21 日)

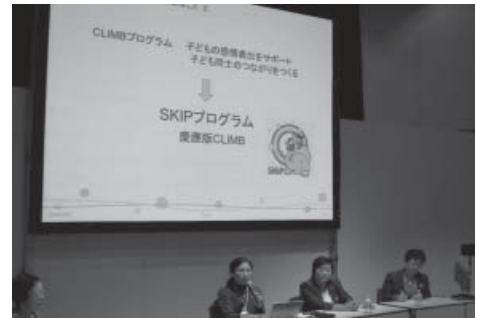


写真 2: ORF セッションの様子

3) 研究実践

(1) 介入研究: CLIMB® プログラム (6 セッション)

第 1 回を 2014 年 9 月 28 日~実施. 現在, 対象者に対する介入研究の評価およびプログラム内容の評価を行っている.



写真 3: 第 1 回 CLIMB® の様子



写真 4: 【悲しみ】の作品

(2) 実態調査: 啓発活動による看護師の認識の変化について現在調査結果の分析中である.

2. 今後の課題, 展望

- 1) 啓発活動を評価し, 次年度の活動の検討および看護支援プログラムの検討を行う. 看護以外の医療職種, 学生への啓発活動等の検討し, 実施する.
- 2) 日本版 CLIMB® プログラムの実施評価, 次年度のプログラム実施の継続.

3. 2014 年度の業績

- ・茶園美香: シンポジウム「親ががんになったとき, 子どもが必要としていること」. 子どもだって知りたい - 親ががんになったとき, 子どもに何を伝え, どう支えるか? - . 第 52 回日本がん治療学会学術集会学術セミナー 18 (神奈川), 2014.08.29.
- ・慶應義塾大学病院 SKiP チームメンバー: セッション「がん患者を親に持つ子どもへの支援」, Open Research Forum, 慶應義塾大学 S F C 研究所, (東京), 2014.11.21.
- ・茶園美香: 総論; 親のがんを, なぜ子どもに伝えたほうがよいのか. 特集; がんの親と子どもをチームで支える. NursingToday, 26(6), 8-11, 2014
- ・茶園美香: とても大切な人ががんになったときに開く本, 緩和ケア編集委員会編, 緩和ケア (24)6 月増刊号, 青海社, 2014
- ・Mika Chaen, Etsuko Shindo, Miyuki Semba :Nurse's Awareness and Support for Cancer Patients Explaining Their Disease to Their Children, 18th International Conference on Cancer Nursing, Panama City, PANAMA, 2014.9.9
- ・仙波美幸, 茶園美香, 新藤悦子: 「がん患者が子どもに病気を伝えることへの看護師の認識と支援の実態」, 第 29 回日本がん看護学会 (神奈川), 2015.2.28

サスティナビリティの高い妊婦セルフケアプログラム 「冷え症改善パック」の有効性 ランダム化比較試験による検証

中村 幸代 看護医療学部 専任講師

A. 目標

本年度の目標：プログラムを完成させて、データ収集を実施する。

【目的】

本研究は、冷え症である正常経過の妊婦を対象に、妊婦の冷え症がもたらす異常分娩を予防するための、サスティナビリティの高いセルフケア支援プログラム「【自宅で行える】冷え症改善パック」を作成し、冷え症の改善への有効性を評価することである。

【仮説】

- ①プログラム実施 1 か月後のプライマリアウトカム
 - ・介入群において、四肢末梢の体温が 1℃以上上昇する。
- ②セカンダリアウトカム
 - ・介入群において、冷え症の自覚が有意に ($p < 0.05$) 軽減する。
 - ・介入群において、冷え症に伴うマイナートラブルが有意に ($p < 0.05$) 軽減する。
 - ・介入群において、妊婦のセルフケア行動の意識が高まる。

【意義】

本研究は、慣例的に行われてきた現行の助産ケアの主軸ともいえる冷え症に対する実践知へのエビデンスの提唱である。

また本研究では、妊婦の冷え症をはじめとする自己の「からだ」を向き合うことにつながる。冷え症の改善は日常生活の改善が必須であり、急速に改善できるものではない。このプログラムは、一貫性に乏しい冷え症へのケアをパッケージにして提供し、毎日 Web アプリケーションにてプログラムの実施状況をセルフ評価するもので、サスティナビリティの高さを狙っている。

B. 計画および実施過程

4 月～7 月：プログラムの完成、倫理審査委員会に申請と承認を得る。

7 月～9 月：調査予定施設の開拓と依頼、リクルート、データ収集のための研究協力者（アシスタント）の選定と教育、データ収集の準備

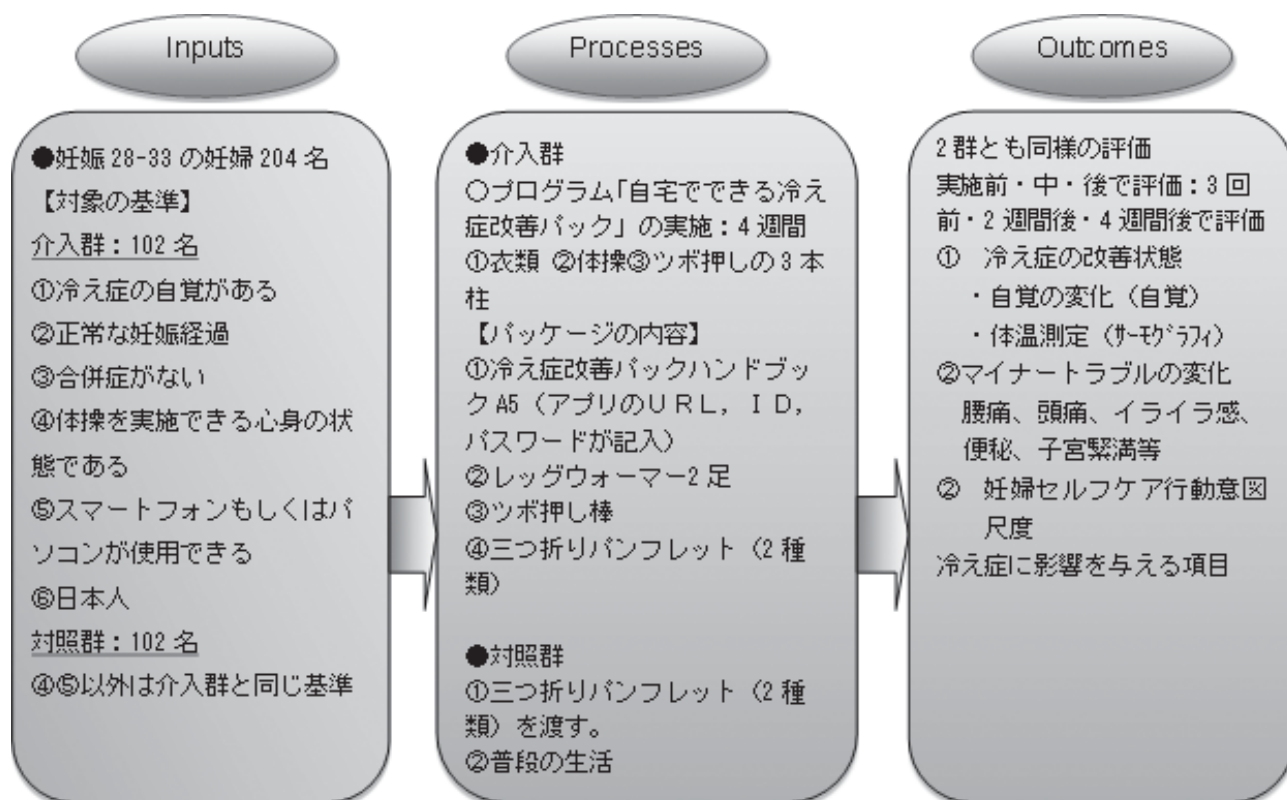
10 月～：データ収集の開始

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

現在、総リクルート数は約 70 名であり、3 月までデータ収集を続行する。

【介入の実際】



イメージキャラクターの「フィガロ」です！よろしくにゃ



*アプリケーションの特徴は、イメージキャラクターの作成し、見た目の可愛らしさ、楽しさ、簡単さ、点数に応じたメッセージを送ることで意欲的に望めることである。

フィガロがアプリで毎日応援メッセージを送るよ！



2. 今後の課題、展望

予定より、対象者が少なく、リクルートが遅れているため、引き続き実施し、3月まで必要最低限のサンプルサイズの獲得を目指す（必要サンプルサイズ：介入群 76 名、対照群 76 名）。

3. 2014 年度の業績

- ・中村幸代：エビデンスに基づいた冷えが妊産婦に及ぼす影響について、日本看護協会長野県支部 講演会講師、2014 年 7 月。
- ・中村幸代：日本冷え症看護 / 助産研究会の紹介、SFC Open Research Forum2014（東京）、ポスター発表、2014 年 11 月。
- ・中村幸代：日本看護科学学会学術論文優秀賞
受賞論文「妊婦の冷え症と微弱陣痛・遷延分娩との因果効果の推定—傾向スコアによる交絡因子の調整—」、2014 年 12 月。

がん患者に対するマインドフルネス教室の効果研究

朴 順禮 専任講師

A. 目標

Mindfulness-Based Cognitive Therapy(MBCT) をベースとした日本のがん患者向けマインドフルネス教室を開催し、マインドフルネス教室の実施により、がん患者の精神的症状や QOL の改善に効果的であるかを検討する

B. 計画および実施過程

- 1) がん患者用マインドフルネス教室内容の検討
- 2) がん患者に対するマインドフルネス教室の実施
- 3) 予備調査終了
- 4) がん患者に対するマインドフルネス教室の有用性について RCT 検討

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

- 1) 乳がん患者に対しマインドフルネス教室による介入を実施し、予備調査における結果を第 14 回日本認知療法学会学術集会および第 27 回サイコオンコロジー学会総会で発表した。サイコオンコロジー学会で発表した「がん患者に対するマインドフルネス教室の主観的効果について」がベストポスター賞を受賞した。
- 2) がんプロフェッショナル養成基盤推進プランー高度がん医療開発を先導する専門家の養成ー「緩和・在宅」におけるワークショップの企画
高野山大学 教授 井上ウイマラ先生をお迎えして、「マインドフルネスからスピリチュアルケアへ」についてワークショップを開催した。昨年引き続きマインドフルネスをテーマに医療者向けワークショップを開催した。2015 年 1 月 東京
- 3) 肺高血圧症の患者会において「マインドフルネスで今を生きる」の講演会を実施。2014 年 11 月 東京

2. 今後の課題、展望

引き続き研究の継続を実施する。

3. 2014 年度の業績

- 1) 朴 順禮、佐渡 充洋、佐藤 寧子、竹内 麻理、二宮 朗、神野 浩光、高橋 麻衣子、藤澤 大介、吉村 公雄. がん患者に対するマインドフルネス教室の実施可能性に関する探索的研究ー第一報ー. 第 14 回日本認知療法学会学術集会. 2014.9 大阪
- 2) 朴 順禮、佐渡 充洋、佐藤 寧子、竹内 麻理、二宮 朗、神野 浩光、高橋 麻衣子、藤澤 大介、吉村 公雄. がん患者に対するマインドフルネス教室の主観的効果について. 第 27 回サイコオンコロジー学会総会. 2014.10 東京
- 3) 二宮朗、佐渡充洋、朴順禮、佐藤寧子、高橋智子、新井万佑子、三浦有紀、山本和広、石原智子、田淵肇、白波瀬丈一郎、加藤元一郎、三村將. 不安障害に対するマインドフルネス認知療法の効果検証：preliminary study 第 1 報. 第 18 回日本精神保健・予防学会学術集会. 2014.11 東京

若手研究者の会（わかばの会）

矢ヶ崎香 慶應義塾大学看護医療学部 准教授

井ノ下心、笥亮子、仙波美幸 慶應義塾大学看護医療学部 助教
高畑和恵、瀧田結香、中尾真由美
平野蘭子、真志田祐理子、緑川綾

A. 目標

勉強会等を通じて若手研究者同士の交流を図り、研究能力の向上を目指すことを目標に活動を行った。

B. 計画および実施過程

2014年3月 論文抄読会

2014年11月 ORF2014への出展

C. 目標達成状況

1. 研究実践活

ORF2014において、わかばの会としてポスター展示を行った。ポスターは、「若手研究者の取り組み」と題し、各研究者それぞれが取り組んでいる研究について紹介した。

2. 今後の課題、展望

- 定期的に勉強会を開催し、研究能力の向上に努める。予定したものの、今年度実施できなかった科研申請書の書き方勉強会のほか、研究方法についての勉強会や論文抄読会を開催する。
- 今年度に続き、わかばの会として ORF への参加を検討する。

3. 2014年度の業績

- 2014年5月23日 論文抄読会
- 2014年11月21日、22日 ORF2014にてポスター出展
看護ベストプラクティスラボラトリ若葉の会—若手研究者の活動と課題—
Laboratory on Innovative Research and Practices for Nursing; Challenges of WaKaBa



写真：わかばの会 活動風景

Quality Improvement を担う先導ナースの 養成プログラムの開発検証

小池 智子 看護医療学部 准教授

A. 目標

本部門は、最適なケアと患者のアウトカムを達成するために、チームやユニットでケアの質保証システムを稼働し、これを先導する看護リーダーの育成プログラムを開発し実証することを目指している。

2014 年度は、前年度の課題を踏まえ、以下の 2 つのプログラムを再設計し、実施した。

1. Quality Improvement を効果的にすすめる「マネジメント・サイクル実践プログラム」の評価
2. 「ケースメ・ソッド教育を用いたマネジメント能力育成プログラム」の開発

B. 計画および実施過程

2013 年度の結果を踏まえて 2 プログラムを改定し、実施・評価を行った。

1. マネジメント・サイクル実践プログラム

- ・参加者が自部署の業務改善活動を適切に評価し改善に反映できるよう、プロセス評価・アウトカム評価の講義・演習・フィードバックを加えた。

2. ケース・メソッドによるマネジメント能力育成プログラム

- ・2014 年度の診療報酬改定および医療制度改革を踏まえ、今日的な看護管理課題に必要なディスカッションの視点を加えたケースの作成と、本教育プログラムの拡大を図った。

C. 目標達成状況

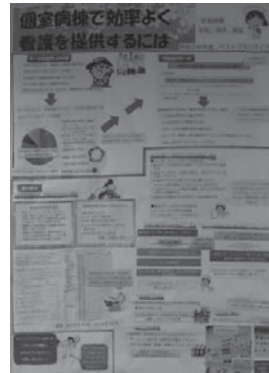
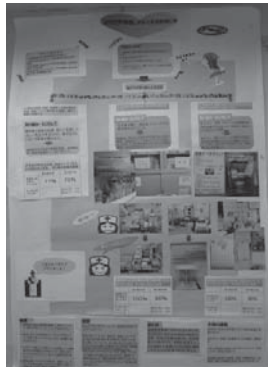
1. 研究実践活動

1) マネジメント・サイクル実践プログラムの実施

2 つの認定看護管理者教育課程の他、2 医療機関 28 部署が通年でプログラム取り組んだ。



A 病院の成果発表
(2015/02/12)



2) プログラム評価

本プログラムを7年にわたり導入し、現在は中堅看護師リーダーシップ養成を主眼に取り組んでいる一医療機関を調査・評価した。その結果、①受講者の6割以上がプログラム終了後も部署が継続して業務改善に取り組み、部署の看護の質向上に寄与していること、②中堅看護師のリーダーシップ力、問題解決能力の育成に有用であることがわかった。

2) ケース・メソッドによるマネジメント能力育成プログラム

(1) ケース開発

①看護管理者の課題に関連したケース

看護管理・政策の専門家チーム（看護部長・研究者・コンサルタント等）を組織し、今日的な看護管理課題に則して、以下の7ケースを新たに作成した。ケースは、受講者が医療機関等を取り巻く外部環境の分析を踏まえ、内部環境分析から資源活用・再編について、組織・人材開発、成果測定等の観点から考え、行動計画を考案できるよう構成している。

- ・高齢の手術患者が多い外科病棟 看護のコア・サービス強化の方策
- ・化学療法が多い内科E病棟 高度化、複雑化した臨床現場をマネジメントする
- ・看護職員の入れ替わりが激しく、定着しないA病院看護部 小規模病院における看護組織の活性化戦略
- ・中堅看護師のモチベーション向上に悩むA病院 中堅看護師のキャリア開発戦略
- ・地域において高度急性期の機能強化を目指す病院の看護部の戦略：これからの病院機能を見据えた看護部門の強化
- ・「7対1」病棟から「地域包括ケア病棟」への転換を検討している病院看護部の戦略
- ・高度急性期機能を強化する7対1病院の看護部の戦略

②行政保健師の課題に関連したケース検討

都道府県医療保健計画の在宅医療を踏まえ、地域における訪問看護・多機能事業所等の普及等に関連したケースと授業計画を設計した。

(2) ケース・メソッド教育による授業・研修の実施

2大学院（看護管理・政策分野）、認定看護管理者教育課程ではファーストレベル4課程、セカンドレベル2課程、研究会9クラスでケース・メソッド教育を実施し、一部のディスカッションは模擬ケースメソッドとして公表した。

(3) 評価方法の検討

ケース・メソッド教育による評価方法について文献検討を行い、また、慶應義塾大学経営管理研究科のケース・メソッド教授法セミナーに参加し、14ケースのディスカッションを通して、ケース・メソッド教育における授業計画、ディスカッション・リード法ならびに評価について、本教育法の研究・実践者と共に分析・検討した。

2. 今後の課題、展望

1) 「マネジメント・サイクル実践」プログラム：効果測定の検証が課題である。今後、プログラムの効果を測定し個人レベル・組織レベル毎に評価する評価項目を開発する。

2) 「ケースメ・ソッド教育を用いたマネジメント能力育成プログラム」：評価方法の開発が課題である。2015年度は特に授業設計および評価方法を検証する。また、医療機関等の人材開発のケースならびに、

行政保健師の能力開発に資するケースを作成予定である。なお、2015年度はケースメソッド教育による講義・研修は、4大学院、8看護管理者研修（ファーストレベル：4、セカンドレベル：3、サードレベル：1）に拡大し実施予定である。

3. 2014年度の業績

【論文等】

- 1)小池智子他：【連載】管理的思考の育成！ケース・メソッド入門①～⑩ 看護展望 39(4～13), 2014.3-12.
- 2)小池智子. 管理的思考の育成！ケース・メソッド入門⑦ケース・メソッドによるディスカッションの研修への導入, 看護展望 39(10), p50-55, 2014.
- 3)小池智子. ケース・メソッド教育におけるディスカッション・リード, 看護展望, 39(13), p20-24, 2014.
- 4)小池智子、大島敏子、鈴木恵子他. これからの看護管理者に求められるものとケース・メソッド教育の可能性, 看護展望 39(13), p32-46, 2014.
- 5)小池智子, 大島敏子、斎藤訓子他：地域包括ケア時代の病院の選択と看護管理者の戦略, 日本看護管理学会誌 18 (2), 135-147,2014.

【学会発表等】

- 1)小池智子, 大島敏子、斎藤訓子他：地域包括ケア時代の病院の選択と看護管理者の戦略, 第18回日本看護管理学会学術集会（愛媛県）, p.87, 2014.8.30.
- 2)中島美文, 岩爪美穂, 小池智子他 (2014)：中堅看護師を対象とした問題解決技法を用いた研修の効果, 第45回日本看護学会－看護管理－（宮崎県）2014.9.
- 3)Tomoko Koike (2014): Quality Improvement activities in Japan. UCS Conference, Ipswich UK. (2014.9.9)
- 4)Tomoyuki Takura, Tomoko Koike, Atsuko Sekimoto et.al (2014): Agreement between patient's and proxies reports of health related quality of life in patients with end-stage lung cancer in Japan. 2nd International Conference on Nursing & Healthcare. Chicago, USA.(2014.11.19)

臨床倫理における看護師の役割と支援システムの構築

宮脇 美保子 教授

A. 目標

- ・臨床倫理における看護師の役割と支援システムの構築
臨床倫理における看護師の役割を質的研究により明らかにする。
- ・ケアリング文化の醸成
患者の立場にたった倫理的実践の実現に不可欠なケアリング文化を醸成する。

B. 計画および実施過程

- ・臨床倫理における看護師の役割と支援システムの構築
テーマ:「臨床倫理における看護師の役割と支援システムの構築」
 - 1)臨床倫理において、チーム医療の中で看護師に求められる役割について文献を検討中である。
 - 2)チームに医療において、看護師が果たす倫理的役割に関する情報収集のため、海外視察を計画する。
 - 3)倫理セミナーを開催する。
- ・ケアリング文化の醸成
医療機関、大学等での看護におけるケアリング環境の重要性について講演を行う。

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

- ・臨床倫理における看護師の役割と支援システムの構築
 - 1)医療機関、看護協会等での看護実践における倫理と責任について講演した。
 - 2)医療倫理関連学会における活動を通じて、倫理コンサルテーションシステム構築に向けての情報収集、情報交換を行った。
 - 3)学会活動の一環として、「病院倫理委員会コンサルタント連絡会議」のメンバーとなった。
 - 4)海外視察は、視察先との日程調整が困難であったため、次年度に計画する。
 - 5)2014年7月15日(火)「ケアの倫理」をテーマとしたファビエンヌ・ブルジュール講演会(東洋大学)に出席し、フランスと日本との比較について討論した。
 - 6)2015年3月17日(火)「ケアの倫理」セミナーを東洋大学の原山哲教授とともにオーガナイズし、大学院生を中心にフランスと日本との比較について討論した。
- ・ケアリング文化の醸成
 - 1)医療機関、大学等での看護におけるケアリングについて講演した。
 - 2)2014年10月31日
The 3rd Eulji International Nursing Conference(韓国)で招待講演を行った。



We Learn by Teaching: Professional Development for Japanese Mid-Career Nurses

2. 今後の課題、展望

・倫理コンサルテーションシステムの構築

- 1) 「ケアの倫理—ネオリベリズムへの反論」の著者であるファビエンヌ・ブルジェール (Fabienne Brugere, フランス・ボルドー・モンテニュ大学・哲学教授) のセミナーに関する成果の公表 (著書) を計画している。
 - 2) クリーブランド・クリニックの視察を予定している。
 - 3) 看護師を対象とした臨床倫理におけるインタビューを予定している。
- ・ケアリングにもとづく教育の実践・研究

3. 2014年度の業績

- 1) 石井 邦子, 亀井 智子, 川城 由紀子, 宮脇 美保子, 宮林 郁子, 野村 美香
看護学研究における倫理的環境整備に向けた実態調査 (第1報) —看護系大学における研究倫理審査の現状—日本看護科学会誌 Vol. 34(2014) No. 11 p.74-83
- 2) 野村 美香, 宮林 郁子, 宮脇 美保子, 川城 由紀子, 亀井 智子, 石井 邦子
看護学研究における倫理的環境整備に向けた実態調査 (第2報) —若手研究者の研究倫理審査ならびに利益相反と被験者補償の現状—日本看護科学会誌 Vol. 34(2014) No. 11 p.84-93
- 3) 宮脇美保子
高齢糖尿病患者の倫理的調整—高齢患者の権利擁護と倫理的調整—日本糖尿病教育・看護学会誌, 18(1), pp. 61-62.2014

倫理セミナー

『ケアの倫理～日仏の比較を通して』

セミナーの趣旨
ファビエンヌ・ブルジェール先生が、ルブラン先生とともに、再来日します。「ケアの倫理」をめぐって、日本とフランスの比較を焦点に、議論してみたいと思います。高齢者の一人暮らしが99%のフランス、17%の日本という格差から見ても、「ケアのありかたには、相違があるのではないか」「脆弱な患者への配慮、支えは、家族を超えた公共のはたすことではないのか」「福祉国家が性別役割分業を前提としてきたとすれば、平等の『超人』をめざすケアの社会は、どのように実現できるのだろうか」といった論点が考えられます。

日時：2015年3月17日(火) 15時30分～18時30分
場所：鹿野義塾大学 信濃町キャンパス 孝養舎2階
マルチメディア室
参加費用：無料

進行役：原山哲/ 山下りえ子(東洋大学)・宮脇美保子(鹿野義塾大学)
プレゼンター：
1. ファビエンヌ・ブルジェール 先生 (パリ第8大学)
「個人の政治—支えるとは？」
2. キヨム・ルブラン先生 (ボルドー大学)
「脆弱性への対応をどうするか？」
3. 阿部又一郎先生 (東京医科歯科大病院)
「不眠症とケア」
4. 原山哲先生(東洋大学)
「フランスと日本の在宅ケア」

プレゼンテーション終了後、参加者とともに「ケアにおける日仏の比較」についてのディスカッションを予定しております。

セミナーへの参加を希望される方は、下記までご連絡下さい。
Email: mmirawa@sfc.keio.ac.jp (3月10日までに)

慶應義塾大学 SFC（湘南藤沢キャンパス） OPEN RESEARCH FORUM への出展

質の高い看護実践（ベストプラクティス）の重要性や課題、成果を広く社会に発信、啓発するために、看護職をはじめとした医療専門職のみならず、患者や市民の方と意見交換する機会を設けています。

今年度は、11月21日（金）～22日（土）に六本木の東京ミッドタウンで開催された、SFC OPEN RESEARCH FORUM（ORF）のブースに出展しました。

ORFは、SFCにおける研究成果を社会へ還元するための一般公開の場として、1996年から毎年開催されています。外部の評価を得ると共に産官学協力関係の円滑化と強化を図り、研究活動に反映させるということが目的としてあり、今回は、「PROTO-UNIVERSITY」というテーマで、50を超える研究成果の展示発表、40のトークセッション、来場者が自ら「創る」「体験する」ことができるワークショップなどが行われました。当ラボの展示ブースでは、活動全体の紹介と共に、わかばの会～若手研究者の活動と課題～、高齢者に対する認知症予防・健康増進のための園芸活動の試み、がん患者の親をもつ子どもへの支援、日本冷え症看護/助産研究会の5つの展示を行いました。

ブースの一角では、認知症予防・健康増進のために行っている園芸活動の特徴や楽しさを知り、共有できる機会をつくるために、小グループでの多肉植物の箱庭づくりも実施し、多くの方が関心を持って参加されました。

また、がん患者の親をもつ子どもへの支援ではトークセッションを開催し、共同して研究・活動を行っている大学病院看護師、チャイルドライフスペシャリスト、サポートグループ代表がスピーカーとして登壇し、興味深い内容の発表が行われました。

